

スパイダーマン2

2004(平成16)年7月30日鑑賞(ナビオ TOHO ブレックス)

★★★★



監督=サム・ライミ/出演=トビー・マグワイア/キルスティン・ダンスト/アルフレッド・モリーナ/ジェームズ・フランコ/ローズマリー・ハリス/J.K. シモンズ (ソニー・ピクチャーズエンタテインメント配給/2004年アメリカ映画/130分)

……前作をしのぐ220億円という史上最高の製作費をかけた『スパイダーマン2』は、現在のハリウッド映画戦略の象徴的な作品。しかしいくら興行収入を競い合っても、それは宣伝費用との兼ね合いもあるはず。たしかに、正義の味方スパイダーマンのキャラクターはかなり身近なものだし、勧善懲悪のストーリーは単純でわかりやすい。そしてまた映像も美しく、アクションも楽しいものだが、こんなつくり方だけではそのうち……。映画とは何かという本質に立ち戻って、検討する必要があるのではと私は思うのだが……？

製作費220億円の超大作！

スパイダーマンの初登場は2002年。この時も大きな話題を集めたが、実は私はこの映画を観ていない。その理由は簡単。あまり観たいと思わなかったから。そして2年後の2004年7月。史上最高額となる220億円の製作費を投じて『スパイダーマン2』が公開されたが、その前宣伝はすごいもの。マスコミ関係者用のパンフレットも、悪役(?)のDr. オットー・オクタヴィウスの4本のアームと戦うスパイダーマンの姿が立体的に描かれるという立派なもの。一体このパンフレット製作費を含めた宣伝広告費はいくらになるのやら？ 人サマの懐具合ながら気になるところ。そしてパンフレットや新聞広告では、オープニング記録、公開3日間の興行収入等々、興行収入の歴代順位を競い合う数字が並べられている。しかし……。そんな数字を競い合う意味はどこに……。そう思いつつ、映画評論家(?)の私としては、やはり観ておかなければ、という義務感半分でこの映

画を観ることに……。

スパイダーマンのパーソナリティは？

スパイダーマンが面白いのは、何よりも絶対的なヒーローではないこと。むしろ、スパイダーマンとなるピーター・パーカー（トビー・マグワイア）はどちらかといえば目立たない一般の大学生。もちろん優秀な頭脳をもち、内在的な能力はもっているものの、学業とアルバイトとスパイダーマンの三足のワラジをはいて、それぞれ立派にこなすのは大変。そのためスパイダーマン稼業をやっていると、他の2つはおろそかになってしまい、どちらかというところ「落ちこぼれ」気味で、このままでは「負け組」になってしまう感じ。またスパイダーマン稼業に忙しいため、恋人のメリー・ジェーン・ワトソン（MJ）（キルスティン・ダンスト）とも十分な交際が実現できず、また恋人が敵に狙われる危険を考えると愛の告白もままならないというジレンマに。そのためこの映画では、遂にメリー・ジェーンからは別の男と結婚すると宣言される羽目に……。

一時休業（？）を決断したが……？

そんなジレンマの中、遂にピーターはスパイダーマンの一時休業（？）を決断した。世のため人のために働くことも大切だが、1人の愛する女性のために生きることが大切だ、と悟ったわけだ。ところが、男女の恋の波長が、ピッタリと合うことは少なく、逆にかみ合わない方が多いもの。メリー・ジェーンがピーターにキスを求めてきたり、ピーターの「決断」を求めて迫ってきた時には、ピーターはそれに応えることができず、逆にピーターがメリー・ジェーンへの愛に生きようと決心したときには、既に他の男に心変わりした（？）メリー・ジェーンは、「あなたの申し込みは遅すぎた！」とはねつけることに……。しかし、いったんスパイダーマンをやめて、メリー・ジェーンとの愛に生きることを決断したピーターは、ずっとメリー・ジェーンを求め続けることに。しかしその間社会では……。

パトカーのサイレンが鳴っても、ピーターはあえてこれを無視し、誰かが襲われていても、これを見て見ぬふり。そんな中で、犯罪の検挙率は下がる一方だ。

しかし、燃えさかる火事の中、子供が家の中に取り残されていると聞いたピーターは、矢も盾もたまらず、スパイダーマンとしてではなく、ピーターとしてその火の中に飛び込んだ。さあ、ピーターの決断による、スパイダーマンの一時休業状態は一体いつまで続くのだろうか……？

Dr. オットー・オクタヴィウスの良心と4本アームの面白さ

前作のスパイダーマンの敵がどんなヤツだったのかは知らないが、このパート2で登場する Dr. オットー・オクタヴィウスが身につけている人工知能をもった4本のアームという発想とその姿はユニークで面白い。この人工知能をはじめて身にまとった研究成果の発表当日の様子も、よく描かれており、さすがと感心させられるもの。またこの Dr. オットー・オクタヴィウスは、もともと優秀で真面目な科学者だから、一方で自分の研究の失敗（＝計算まちがい）を反省したり、結果的に異様な超能力を身につけてしまったわが身の危険性を自己認識したりする良心もっている。したがって彼が、その良心と、あくまで自分の研究を完成させたいという科学者が当然もつ欲求とのジレンマに悩む姿もよく描かれており、説得力がある。スパイダーマンは何回もこの Dr. オットー・オクタヴィウスと「対決」するが、結局、実力では勝つことができず、最後は彼の良心に訴えかけた結果、彼が自らを破壊する途を選択したことによって平和が訪れることになるというストーリーも極めて健全な発想に基づくもので納得できる。もっとも、私の考えでは、Dr. オットー・オクタヴィウスはいくら4本のアームは強くても、所詮人間の生身の身体という設定だから、銃で Dr. オットー・オクタヴィウスの頭を狙い撃ちすればそれでおしまい、と思うのだが……？

ヒロイン役はもう一つ……

スパイダーマンことピーターの恋人となるメリー・ジェーンの役を演じるのは、前作に続いてキルスティン・ダンスト。私は別に彼女に恨みがあるわけではないが、正直言って、このキルスティン・ダンストの魅力はいまひとつ。メリー・ジェーンは、今は、オフブロードウェイにたつチャンスをつかみ、女優への道を歩み始めているが、ピーターの態度がハッキリしないため、イライラの毎日。そし

て、ついにしびれをきらした彼女は、新しいカッコいい恋人ジョン・ジェイムズとの交際を開始し、ついに結婚することに……。さあ、ピーターはスパイダーマンとしてもピンチなら、恋愛においても大ピンチ……。

そんな大切なヒロイン役だし、220億円という大金を投じた映画をつくるのだから、そのヒロインには「絶世の美女」を起用してはどうか、と思うのだが……。

人間ドラマに幅をもたせている脇役陣

スパイダーマンの悩み事の相談に乗っているのが、ピーターの叔母にあたるメイおばさんことメイ・パーカー。メイおばさんは両親を失ったピーターを幼いころから育ててくれた、優しい母親がわりの存在だ。夫に先立たれたため、自分自身も決して楽な生活ではなく、家まで出なければならなくなってしまう境遇だが、彼女の人生観は常に前向き。したがって彼女がピーターに語る言葉には説得力がある。またスパイダーマン嫌いのピーターの上司J・ジョナ・ジェイムソンのパーソナリティも面白く、ストーリー展開の節目節目に登場して、いい味を出している。

何と、スパイダーマン3の製作も決定

パンフレットによると、『スパイダーマン2』の公開を前にして既に『スパイダーマン3』（仮題）の製作が決定され、2007年全米公開予定とされているとのこと。しかし……。いつまでこのようなハリウッド流、売れ筋娯楽大作への一点集中路線が続くのだろうか？

コミック雑誌を題材にしているから云々というわけではなく、スパイダーマンというキャラクターに頼ったうえで、ワイヤー・アクションとCG（コンピュータ・グラフィックス）の技術を競うような映画づくりは、そのうち観客からあきられるのでは？ と思うのだが……。

2004(平成16)年8月2日記